

『傲慢な幼なじみとひみつの恋煩い』

著：森本あき

ill：明神 翼

「玄関でぼーっとしてんな。早く入れ」

「来人が先に入ればいいじゃん」

そう言いながら、琴音は靴を脱いで玄関をあがった。

「やだよ。だれかいたらどうすんだ。すぐ逃げなきゃなんねえだろ」

これは、琴音をからかっているわけじゃない。来人も来人で、静まりかえったこの広い部屋が不気味だと思っただけなのだ。

だったら、もっと狭い部屋にすればよかったのに。どこの撮影所からも近い、幹線道路にすぐ出られる、という理由で、こんな高級地区の超高級マンションを買うとか、絶対におかしい。それも、琴音には相談なし。

ここにしたから、と連れてこられただけ。

いいんだけどね。来人のお金なんだし、タダで住ませてもらってるんだから。いや、正確には会社から出る住宅補助費はすべて来人に渡している。それでも管理費にも満たない微々たるものだ。

全部出してもらっているわけじゃない。ちょっとは払っている。

自分でそう思いたいだけ。

琴音もそれなりにいい給料はもらっている。

来人が琴音を誘ったときに、給料はよくしてもらおうから、と言ってくれたけど、どうせ、そこまでじゃないだろう、と思っていた。そしたら、なんと、月に三十万を超えていたのだ。それも手取りで。来人は個人契約だから保険料とかそういったものは自分で払わなければならないけど、琴音は会社所属なのでいろいろなものがきちんと天引きされている。その天引きの額が大きくて、そっちに目が飛び出るかと思った。

税金を払うのって大変なんだね。

来年（というか、四月からか。年度締めだから）は、また給料があがることになっている。手取りで三十五万ぐらいになるらしい。こうやって五万円ずつあがっていったら、十年後には百万近くなるけど、大丈夫なんだろうか。そんなにとんとん拍子にあがるはずもないことは、ちゃんとわかっている。

とはいえ、朝から晩まで働いて、休みもまったくとっていないほどない。それで三十五万だと、そこまで高いとはいえなんじゃないだろうか、と最近は思ってきた。

別に、給料をあげてほしい、とか、そういうことじゃなくて。これで給料が高いとすれば、ほかのマネージャーさんたちっていくらぐらいで働いているのか、それがすごく気になる。

うちの事務所にはあともう一人しかいないし、来人以外の全員を見ているから、ものすごく忙しそうだし（それでも一人でできてしまうところが弱小事務所の悲しいところだ）、いくらなのか聞いてみたいけど、さすがにお金のことを気軽には聞けない。琴音の方が高かったらどうしよう、という不安もある。

まさか、そんなはずはない、と信じたいから、知らないままにしておく。

「ぼくを犠牲にして、自分一人で逃げるわけ？ ひどくない？」

「大丈夫だ」

来人は、うんうん、とうなずいた。

「葬式は大々的にやってやる」

「死ぬことを前提にしないで！ 助けるのが親友の役割でしょ！」

マンションの外に出たら、役者とマネージャー。いったんマンションに入れば、幼なじみの親友。

そうしよう、と話し合ったわけじゃない。でも、自然にそういうふうになっている。

それが嬉しい。

仕事的时候はマネージャーなので、仕事に対する不満も聞かし、あまりにもわがままが過ぎたら怒るし、雑用はすべてやるし、来人の方が立場が上なのもきちんとわかっているし、それを尊重する。出すぎず、引っ込みすぎず、来人が仕事をやりやすい環境を作る。

それをぶちこわすのが本人だったりするけどね。まあ、それもしようがない。いやなものはいやだ、と我を通すときは、来人の味方をするにしている。だって、マネージャーだもん。来人の一番の理解者で絶対の味方でないと。

いったん家に戻ると、これまでとまったく変わらない。バカな話をして、笑い合っ、たまに喧嘩をして。幼いころからの空気のまま。来人は家でまで仕事モードじゃないし、セリフを覚えたりとかは部屋にこもってやる。そこは、琴音の踏みこめない領域。寂しい、という気持ちも正直あるけれど、アドバイスくれ、とか言われても困る。だって、琴音はただ来人の役者姿を、かっこいい、と思いながら見てるだけだから。

「いやー、さすがにさ、二人とも殺されるのは割りに合わないじゃん？ だから、俺は琴音の死を乗り越えて、将来、アカデミー賞を取って、スピーチで琴音への感謝を述べるから、それを天国から聞いててくれ」

「やだよ！ ぼくもさっさと逃げる！ 足はぼくのが速いからね」

スポーツが得意そうにはまったく見えない、インドア派でしょ、とよく言われるが、琴音は実は運動全般が得意。来人も運動が苦手ではないけど、リレーのアンカーはかならず琴音だった。運動会で活躍すると、え、あのひょろそうな子が？ と周りに驚かれるので、かなり楽しかった。

「そこは、俺の才能を見込んで、おまえが犠牲になれ」

「いやだってば。だいたい、ここに入ってくる人なんて来人が目的なんだからね。来人が勝手に殺されなよ」

「俺が殺されたらニュースになるぞ」

「だれが殺されてもニュースになるよ」

殺人事件なんてめったに起こらないんだから。毎日何十人って殺される、危険な国でもないんだし。

「まあ、いいや。だれもないみたいだから、さっさと入れ。俺は心底疲れた…」

来人が、はあ、と大きなため息をついた。

「あ、そうだね」

琴音は廊下を歩いて、リビングへ向かう。センサーで勝手に電気がつくので、何もしなくていい。

これは本当に楽。

「何か食べる？」

撮影がつづくとお弁当ばかりになって、さすがに飽きる。毎日、一応、業者を変えてはくれるものの、味に大差はない。どこも、そこそこおいしい。でも、お弁当だから味つけが濃くて、冷えてる。あったかいものが食べたいときは自分で買ってくるしかない。ただし、そうすると、用意してくれたお弁当に不満があるように思われるし、その買ってる時間をもったいないと思ってしまう。

だって、お弁当はそこにある。それに、空き時間にさっさと食べられるのはありがたい。

だけど、飽きちゃうんだよね。人間って贅沢。

「お茶漬け」

「お茶漬けね」

やっぱり、あったかいものが食べたいよね。外は寒いし。

「乾杯でもする？」

「いや、もういいや。なんか、祝われ飽きた」

そう、半信半疑だった主演男優賞をお祝いする連絡が、あのあと、ひっきりなしにかかってきた。

もちろん、琴音のスマホに。

さすがに対応しきれなくて、留守番電話にしておいた。それでも、かかりつづけるから、音を消して。電池がとんでもない勢いで消耗していくので、ずっと充電器につないでいた。

監督と話したい。

その来人の希望がなかったら、電源を落としているところだ。

無事に監督と連絡がとれて、ほっと一安心。電話の向こうで監督は号泣していた。来人のおかげだ、ありがとう、これで映画を撮りつづけることができる、つぎのスポンサーがついたんだ、できればまた出てほしい、と一気に言われて、いつでも出ますよ、こっちこそ、現地に行けなくてすみません、監督がかわりに受け取ってくれたんですよ、と来人が謝って。

そう、監督が来人かわりにトロフィーを受け取っているところがどのニュースサイトにも載っていた。がんばって英語でスピーチをしたらしい。

そして、それを受けての、阿久津来人、またもやわがまま！ 現地に行きたくないとごねて、受賞した瞬間を逃す、といった趣旨の記事が何本も出た。

まあね、普通は行くからね。そう言われてもしょうがないよね。このところ、映画賞にはほぼ出向いてないし、レッドカーペットでの質問もNGだから、ここぞとばかりにたたくよね。

暇だね、みんな！

こういうことには慣れっこになっていて、別にどうとも思わない。お仕事お疲れさまです、アクセス数はありますか？ みたいな気分だ。

ドラマと映画、両方の現場で急遽、みんながお祝いをしてくれて、さすがの来人も、ありがとうございます、これからも精進します、みたいなスピーチをして、個別に楽屋に訪ねてくる人も絶えなくて。

祝われ飽きる気持ちもわかる。特に、尊敬している役者さんだと無碍にできず、そのうえ、よかったな、本当によかった、おまえが取るべき賞をたくさん取れるといい、と心からお祝いしてくれるものだから、来人も感激して涙ぐんだりして。

今日はとても感情が忙しかったんじゃないかな。

「じゃあ、お茶漬け食べて寝よう」

食べてすぐ寝るのは体に悪い、とか言っていていられない。明日もまた、朝六時に集合だ。

人気脚本家め！

映画の撮影は明日はないので、スタジオを移動しなくていいのだけが救いだ。

移動のときの運転は、当然、琴音。マネージャーになってほしい、と頼まれて引き受けると、免許が必須、と即座に言われた。琴音が断るなんて思ってなかったにちがいない。だから、マネージャーの条件をきちんと覚えていたのだ。

事務所と交渉してくれて教習所代を出してくれたのは、ものすごく助かった。

親には、免許取るなら合宿が楽よ、と勧められた。もともと、親は免許を取らせてくれるつもりだったものの、大学に入って最初の二年はバイトばかりしていたし、来人が少し時間に余裕ができると来人が遊びに来るのを待ってしまうから教習所にいつ行ったらいいかわからないし、で無理だった。

まあ、無理っていうか、取ろうとしなかった、というか。

それが、いざマネージャーには免許が必要となると、さっさと教習所を決めて、空き時間に足繁く通うんだから、人って単純だよな。

合宿はもちろん却下。そんなに長く家を離れて、来人が遊びに来たときの夜のパーティーに参加できなかつたら悔やんでも悔やみきれない。前みたいにいつでも会えるわけじゃないんだし、部屋の窓から、あ、来人の車が帰ってきた、と見るだけで満足している日々なんだから、会えるときは絶対に会いたい。

…なんか、車が帰ってくるまで見張ってるとかストーカーみたい。

恋をしているだけなんだけどね。それが言い訳になるかどうかは怪しい。

でも、来人が帰ってくるのを見届けないと、安心して眠れない。

それが、いまはずっと一緒にいて、来人が何をしているかも知っていて、どこにいるのかも把握している。

マネージャーだから当たり前だけど、それでも嬉しい。

来人の一番近くにいられる。

「はい、お茶漬け」

お茶漬けは、もちろん、インスタント。それをふりかけてお湯を注ぐだけ。簡単でおいしいって最強だよ。

琴音は帰る前ぐらいにお弁当を食べたので、もう何もいらぬ。

「サンキュ」

来人がお茶漬けをさらさらとかき込む。その姿すら、まるで映画のワンシーンのようだ。

来人は所作がきれい。それは、きちんと努力して身につけたことだから、本当にすごいと思う。

自分がどうすればきれいに映るのか、そういうのをちゃんと研究している。

きれいに見える姿がわかっているから、崩して汚く見せることもできる。逆はできない。汚い動作をいったん身につけてしまうと、そこからきれいに化するまではかなり時間がかかるという。

「なあ、俺さ、いい役者だと思う？」

来人はさっと食べて、自分で流しに持っていく。その途中で、琴音に聞いた。

「うん、思うよ」

来人は自分に絶対の自信があるけれど、だからといって、落ち込んだり、できないかもって悩んだり、俺はだめなんじゃないか、って不安になったりしないわけじゃない。

その両方の感情は両立する。

自信はある。それでも、不安。

だったら、その不安をできるだけ取り除いてあげたい。

「来人、おめでとう。これで、来人の新しい章が幕を開けたね。これから、もっともっと大変な役が回ってくるよ。それを楽しみにしてればいいんじゃない？」

だれとも比べられないような役者になりたい。

それが、来人の望み。

だれだれ二世、とか、だれだれみたい、とか、そういうことを言われぬ、阿久津来人という個性を磨いていきたい、といつも言っている。

カッコいいから、出したら売れるから、でもらうオファーよりも、阿久津来人にやらせてみたい、というオファーを喜ぶ。役者さんならだれでもそうなのかもしれない。

明日から、また新たな依頼が殺到するんだろうな。もともとパンクぎみなのに、それでも、来人は全部の依頼に目を通して、これならやってみよう、と思うものを引き受けてしまう。

来人の仕事を決めるのは、来人自身。ギャラの交渉をするのは社長。スケジュール調整するのが琴音。

完全分業で、いまのところはどうにかなっている。

休みとかなないけどね！

「ありがとう。すごいむずかしい役は、いまはちょっと時間がとれないからこないでほしいんだけど」

「そんなこと言って、実際にオファーされたら引き受けるくせに」
そして、部屋にこもりっぱなしになる。その役とだけ向き合う。
そういうストイックなところは、すごくすごく尊敬している。

「琴音のおかげだよ」

「何が？」

急にどうしたの？

「俺が仕事をしやすいように、毎日がんばってくれてる。俺、ちゃんと知ってるよ。琴音が俺の尻拭いをしてるの。ありがとう」

「それが仕事だから。お給料もらってるんだし」

こうやって真面目に言われてしまうと、照れくさい。

「本当にありがとうな」

来人が琴音のところにやってきた。ぺこり、と頭を下げられる。

「いいえ、どういたしまして」

ここで謙遜はしない。だって、本当にきちんと仕事をしているんだし。感謝されたら、やっぱり嬉しい。

「琴音がマネージャーでよかった」

来人の手が伸びてきた。頬でも撫でられるんだらうか。来人の癖みたいなもので、どこかを撫でるのが好きなんだよね。

でも、ちがった。ぐいっ、とあごを持ちあげられる。

え？ と驚いている間に、来人の顔が近づいてきて、唇が重なった。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>